

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

川村 愛

春立ちぬかき餅を切る祖父の手よ
(評)「昔はあまりお菓子も
ままならなかった。大きな菜
切包丁で丁寧一枚一枚心を
込めて、かき餅を切っていた
祖父、たまたま切り屑がでると
火鉢で焙って食べた素朴な味
と祖父の姿は忘れられません」
と添え書きがあったが、この
句はまさしく幼い頃の郷愁で
あり、古きよき時代のしっか
りした親子関係の絆を感じる
句である。

弘瀬 うき子

初漁やおいでましたか鯰起し

(評)鯰は大海に棲み、長ず
るに従って名が変わる所謂出
世魚として、歳暮の贈り物な
どにされる魚である。冬季は
特に油が乗って味がよいとい
われている「鯰越し」は鯰の
漁期(12月〜1月)の頃にな
る雷のことをいう。「おいで
ましたか」は如何にも海の男
らしい言葉の表現。「雷なん
か気にしては居ないぞ」とい
う心構え。漁は大漁、今年も

寒鯰が来るゾー。

松岡 きよ子

龍降りて節分祭にうねり舞う

(評)節分は四季それぞれに
季節を分ける日を指すが、特
に立春の前日は古くから、一
年の境の日として考えられ、
豊年祭りや、無病息災を祈願
して種々の祭や行事が催される。
龍のうねり舞うのは、選者は「長
崎おくんち」の他は知らないが、
長い龍の胴体に棒を差して、
数十人で胴体を上下にうねり
狂わせながら街中をねり歩く
様は、まことに豪快である。

筒井 文

孫来れば一日短かし炬燵かな

(評)素直にやわらかく詠んで、
誰でも理解でき、心に響く味
わいをもった句である。「孫
くれば」は通常は別居の状態、
時々祖母の許に話し伽に来て
くれるのであろう、孫なれば
こそ心置きなく話が出きる。
中七の「一日短かし」の言葉
に説得性があり、表現の技巧
など何も要らない。

筒井 眉躬

清流は流れを止めず春を呼ぶ

(評)冬枯れの溪流、春の出
水を得て清流となる、冬の落
葉や塵芥の堰を流し、流れに
淀みがなくなる「流れを止めず」

は滔々とまではいわれなくても、
流量の増を意味している。流
れに沿って草が青み花が咲く、
その先の春を感じとっている
のである。

津田 久美

薄氷の木の葉模様になっていし

吉良 美美

春の雨今ある命濡らしけり

小島 良

風強し春は名のみの灯をともし

川上 こよね

一病を持ちて明るし春立つ日

岡本 とも子

木枯をぬけて夜汽車の人となる

竹崎 光子

折角のやる気も萎えし戻り寒

楠目 哲郎

子のくれし酒に酔いたり蹴始

片岡 包女

空すけて帰雁の列を正しけり

刈谷 志津

春光を回して弾む車椅子

友草 水月

風呼びて野焼きの炎畦走る

中野 好子
針仕事できる幸せ針供養

間 浩太
石垣を曲れば陽だまり露の茎

川村 博子
煮返して煮大根好む齡

大川 節弥
鋭角に寒世を切りて翼の灯

川村 千凜子
尾を振りて乳のむ仔牛春立ちぬ

井上 邦子
梅はつはつ一音鳴らぬハーモニカ

渡辺 万利子
狒犬もすわりて受ける春祈禱

中屋 桜子
春寒し何だかんだの店屋酒

松尾 満津於
新調の靴跡残る雪女郎

次題 「当季雑詠」 五句
締切 毎月十五日

投句先

吾北教育事務所
上八川甲2010

☎867-2133

